

レーザー加工機を用いた立体表現技術の開発 — 薩摩焼用型板への展開 —

麻模様の陶板：眞窯



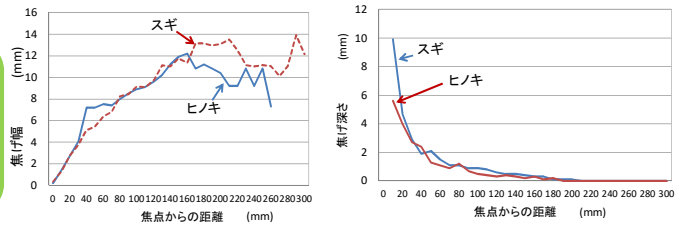
2018 新かごしまの特産品コンクール
鹿児島県農協協会会長賞

企画支援部

概要

工芸品等の製造にレーザー加工機が用いられ、生産性や品質の向上、そして新しいデザインの開発に役立っています。今回、当センター所有のレーザー加工機の焦点からの距離や加工条件を変化させることで、工芸素材に新たな立体表現技術を加え、薩摩焼用の型板を開発し、様々な窯元で商品化されました。

レーザー加工機の焦点からの距離を変化させることにより、木材の表面に凹状の浅彫りをすることが可能になりました。



焦点距離の違いによる焦げ幅・深さ

さらに、速度、出力、デューティ値を制御し、図柄加工のはじまりの過度な出力を軽減しました。図柄の再現性が向上することで、薩摩焼用の型板の製作が可能となりました。



デューティ値の違いによる図柄の再現性



薩摩焼用の型板

薩摩焼協同組合内に「薩摩焼型板研究会」を結成し、型板を使った製品作りの技術情報交換等を実施しました。



薩摩焼型板研究会（会長 志光窯：下佛豊志）



薩摩焼フェスタにおいて10の窯元が型板を使った商品作りに取り組みました。

個展や展示会で販売もはじまり、特産品コンクールにおいて入賞する窯元も出てきています。



朝露文様平皿 志光窯



青海波文様平皿 隼風窯



丸七宝文様丸皿 陶蔵窯



大島袖文様平皿 御茶碗屋 つぎの虫

型板を使った商品の例



いちおし

レーザー加工機の焦点からの距離を変化させることで、複雑な加飾を施した薩摩焼用の型板の製作が可能です。



キーワード

レーザー加工機、焦点距離、加工条件、型板、薩摩焼、薩摩焼型板研究会

